学校体育におけるフラッグフットボール授業の現状と課題
－戦術学習の視点からの分析－

田中 宏樹
（兵庫教育大学大学院）

【目的】

フラッグフットボールの教育的価値と学習指導要領に登場することになった背景を明らかにするとともに、これまでの学校体育におけるフラッグフットボール授業の現状と課題をまとめ、戦術学習の観点から学習内容を分析・検討することを目的とした。

【方法】

1）フラッグフットボールが体育授業に導入された背景を明らかにするために、小学校学習指導要領における「ボール運動」の内容の変遷と、その内容に密接に関係する戦術学習論についてまとめることにより、フラッグフットボールの教材価値について考察した。

2）フラッグフットボールの作戦・戦術・技術の系統に関する先行研究の内容をまとめるとともに、フラッグフットボールの基本戦術と著者自身の実践からの気づきを基に考察することにより、フラッグフットボールの作戦・戦術学習の系統に関する観点を提示した。

3）『体育科教育』にこれまで掲載されたフラッグフットボール実践を、上記で提示した作戦・戦術の系統の観点から分析した。

【結果と考察】

1）小学校学習指導要領におけるボール運動の内容は、1998 年版からそれぞれの型ごとに分類して記述されるようになり、2008 年版から「ボールを受ける動き」や、2018 年版から「ボールを持たないときの動き」といったボールゲーム共通の学習内容が強調されるようになった。また、フラッグフットボールは、ゲームの修正がしやすい「やさしいボールゲーム教材」であり、「ボールを持たない動き」が認識しやすく、誇張して指導できる「戦術学習に適した教材」であることが評価され、2008 年度からの学習指導要領に導入されるに至ったことが把握された。

2）先行研究を網羅する中で、「戦術レベル(技術の方針)の段階の学習」の系統は示されているが、「作戦レベル(攻撃の方針)の段階の学習」の系統については示されていないことが明らかとなった。また、「作戦と戦術の違い」が人によって様々に解釈されており、また、それらの言葉は混同されて使用されていることも示された。したがって、フラッグフットボールの戦術学習の系統について検討するためには、「作戦」「戦術」の概念を整理した上で、「戦術の系統」だけでなく、「作戦の系統」について検討する必要があると考えた。具体的には、フラッグフットボールの「作戦」「戦術」学習の系統を、「戦術レベルの領域」として「決め打ちのプレーを考える段階」と「状況判断が伴うプレーを考える段階」、並びに「作戦レベルの領域」として、「決め打ちのストーリーを考える段階」と「状況に応じて分岐するストーリを考える段階」の計 4 つで捉えていくべきことを導き出した。

3）先行実践を「戦術レベル(技術の方針)の段階の学習」に取り組まれているのか、「作戦レベル(攻撃の方針)の段階の学習」に取り組まれているのかについて判断し考察した結果、「作戦レベルの学習段階」に到達するには、小学校高学年以上を対象とし、かつ長時間の学習が必要とされると考えた。また、中学生以上を対象にした実践では、そのほとんどにおいて「作戦レベルの学習段階」に到達していることも示された。さらに、「戦術レベルの学習段階」における「状況判断が伴うプレー」は、高学年を対象とした実践では全て取り組まれていたが、中学年段階においてはパスプレーを採用するかで、意見が 2 分化していたため、検討が必要であることが明らかとなった。

【結論】

本研究を通して、フラッグフットボール授業の現状を踏まえた課題と改善点は以下のようにまとめられた。

1. 「作戦」と「戦術」の概念が混同されており、「作戦を考える学習」が系統化できておらず、その学習段階に至るまで授業が長時間かかっているため、「作戦並びに戦術」の学習段階を系統化していく必要がある。
2. 戦術(定石)の指導内容が不明瞭であるため、その学習内容を明確にする必要がある。